



カントウータ

Cantuta No.18

平成 24 年 5 月 25 日発行

目 次

1. 事務局からのお知らせ	1	5. もうひとつのボリビア	8~9
2. 語り継ぐ”日本人移住”の歴史	1~3	6. ボリビア訪問記 (第3回)	9~10
3. ボリビアに銘木を求めて	3~4	7. じゃがいもの旅の物語	11~12
4. ボリビアの片田舎で	4~8	8. 新入会員	12

事務局からのお知らせ

1. 平成 23 年度秋の理事会を開催しました

日時：平成 23 年 12 月 22 日 (木)

14 時 00 分～16 時 00 分

場所； ラテンアメリカサロン (西麻布、大使館ビル 8F)

審議事項及び議決事項

第 1 号議案：活動報告 (2011 年 5 月 26 日以降)

第 2 号議案：国本・杉浦両理事ボリビア訪問報告

第 3 号議案：日本人ボリビア移住 100 年誌『ボリビアに生きる』スペイン語翻訳出版企画

翻訳料が 50 万円程度、印刷代を含めた総額について見積もり詳細は 2012 年 6 月以降となった。

費用調達については、国際交流基金などからの助成金を獲得して賄うよう優先的に努めること、不足する場合には、平成 23 年度予算の支援事業費・援助費として計上済みの 400,000 円の中から、予算執行状況も考慮しつつ、可能な範囲で支援を検討することが了承された。

第 4 号議案：その他

2. 平成 23 年度理事会及び定期総会の開催

日時：平成 24 年 5 月 28 日 (月) 14 時 00 分～

場所：ラテンアメリカサロン (西麻布、大使館ビル 8F)

議題 1. 平成 23 年度事業報告・収支決算承認

2. 平成 24 年度事業計画・収支予算承認

3. 事務所変更・定款変更

4. 法人格移行の方針承認

5. その他

・役員の選任

・会員の入退会

次回のカントウータ 19 号で総会決定事項を報告します。

3. 大貫良夫副会長叙勲授与

春の叙勲で瑞宝小綬章を授与されました。

心よりお慶び申し上げます。

語り継ぐ “ボリビア日本人移住の歴史”

ボリビア日本人移住資料館企画展「移住証言」

ボリビア日本人移住資料館 館長 西昭三

2010 年にラパス日本人会内に設立した「ボリビア日本人移住資料館」では、ラパス市の協力を得て 2011 年 5 月から約 1 ヶ月に渡りラパス市立の博物館にて企画展を開催しました。

「移住証言」と題した同展では、ボリビアで様々な人生を歩んできた日本人移住者のインタビューをパネルで展示。連日多くの来館者があり、日本人移住史をボリビアに紹介する好機となりました。

◇

日本人が最初にボリビアに移住したのは1899年。出稼ぎ労働者としてペルーへ渡ってきた第一回ペルー移民790名のうち93名がアンデス越えをし、ボリビアのゴム園に就労したのが日本人ボリビア移住の始まりとされています。

そして、日本人ボリビア移住史は今日に至るまで1世紀以上の歴史を重ねてきました。

これは南米の日本人移住史において最も古い歴史を持つペルーと肩を並べるものです。

「ボリビア日本人移住資料館」は2009年のボリビア日本人移住110周年におけるラパス日本人会の記念事業として設立準備が進められ、2010年3月に運営を開始しました。

ボリビアには現在1万3000人以上の日系人がいるといわれていますが、戦前の初期移住史を知る人は近年ほとんどいなくなってしまいました。112年におよぶ歴史の中で日本人がどのように生き抜いてきたのか。今それを記録しておかねば、この先、この歴史を知る手段はなくなってしまいます。ボリビア日本人移住資料館は先人たちが歩んだ道を次の世代に伝えていくことがボリビアで今を生きる私たちに課せられた使命であると考え、日本人移住者に関する資料をボリビア全土より集め、保存、展示していくことを運営方針としています。

近年、ラパス日系社会は1世から2世の時代へと世代交代しつつあり、さらに3世、4世といった新しい世代も活躍を見せています。時代が移り変わってゆく中で、新しい世代が自分たちのルーツをしっかりと心に刻んでいけるように、その歴史をきちんと継承し、また、ボリビア人にも日本人がどのようにボリビアで現在の地位を築いたのかを知ってもらうことで、ボリビア社会とボリビア日系社会の更なる相互理解、延いては日ボの更なる親善につながればと願っています。



そうした意味でも当館の通算3度目となる企画展「移住証言」(2011年5月13日～6月10日開催)は画期的なものでした。ボリビアの民俗・文化を扱うラパス市立ファン・デ・バルガス博物館での

展示会が実現したことで、より多くの人にボリビアの日本人移住史を知ってもらうことができました。ファン・デ・バルガス博物館には連日のように地元小・中・高生が団体客として見学に来るほか、国内外より多くの観光客も訪れます。また、展示期間中の5月21日はラパス市内の全ての美術館、博物館が深夜0時頃まで無料開放される「ラルガ・ノーチェ・デ・ムセオス(博物館の長い夜)」というイベントが開催され、ファン・デ・バルガス博物館には、この日一日だけで数千人の来場者がありました。

このイベントに際してはボリビア日本人移住資料館でもスタッフが着物で来場者を案内したり、会場の一角ではソーラン節や日本人アーティストに演奏を披露してもらい、来場者の日本に対する興味、関心をさらに掻き立て、好評を得ました。

「移住証言」では展示内容もこれまでの企画展とは違った試みをしました。昨年運営をスタートした当館はまだまだ所蔵資料が少なく、そうした中で充実した展示を図るため、移住者の体験談をパネルにまとめ、どんな暮らしをしてきたのかを移住者たちの言葉で紹介しました。パネルにした証言は全部で11名分。ゴム景気に沸いたボリビアでゴム採取労働に従事した者、軍の散髪係りとしてチャコ戦争に同行した者、一攫千金を夢見て鉱山に生涯を捧げた者、商業で成功を収めた者…ボリビアで生きた様々な日本人の姿を証言によって来場者に伝えました。

今、当館では移住証言を映像で残す作業を行っています。文字情報だけでなく、当事者の実際の声と映像が語る移住の歴史には格別なものがあります。1世が少なくなり「証言」がどんどん貴重なものとなっていく中で、一人でも多くの移住者から体験談を聞き、ボリビア日系社会の財産となるように、未来に残していければと考えます。

.....

ボリビア日本人移住資料館へのお問い合わせ

E-mail: museo.jp.lpz@hotmail.com

※日本人移住史に関する資料等をお持ちの方、是

非、当館への寄贈をご検討ください。



写真1 企画展「移住証言」の様子



写真2 「Larga noche de museos」では和服での案内、日本人ミュージシャンによるコンサートなどが行われた。

ボリビアに銘木を求めて

北三(株) 代表取締役社長
尾山 信一

2010年入会させて頂きました、北三(株)の尾山と申します。

私共の会社、北三(ほくさん)は、世界中に銘木を探し求め、買い付けた原木(げんぼく)を加工して、ツキ板という製品を生産しております。「ツキ板」という言葉はあまり馴染みがない言葉だと思いますが、木目・柄・色などが美しい、いわゆる銘木を大きなカンナのような機械で0.2mm~0.5mm程度の薄さにスライスしたものがツキ板です。このツキ板は合板、繊維板、紙、金属、プラスチック、ガラスなどに貼り合わされ、家具・楽器などの表面や住宅・ホテル・オフィス・自動車などの内装の化粧材料として使われております。銘木と

言えば日本ではケヤキやヒノキ、海外ではチーク、マホガニー、ローズウッドなどが有名ですが、世界中にはまだまだたくさんの銘木があります。私共がこれまで手がけた銘木は300種類以上に達しています。

◇

さてそんな私共とボリビアとの繋がりは今から40年ほど前に遡ります。1960年代後半に私共は隣国ブラジルにおいて銘木中の銘木と言われていたJACARANDA(ジャカラнда=ブラジリアンローズウッド)の原木の買付を行っていましたが、サンパウロ近郊のサントス港の置き場でMORADO(モラード=アンデスローズウッド)という、木目が美しい紫檀系の木に出会ったのがそもそもの始まりでした。一目で木口(こぐち=丸太を輪切りにした年輪が見える部分)から見える縞模様の美しさに魅せられた買付担当者が出場所を探したところ、ボリビアのサンタクルスより貨車で運ばれたことが判り、さっそくサンタクルスに行き木材屋を廻りMORADO原木の買付が始まりました。

その後、ボリビア政府が原木での輸出禁止を打ち出したことから、1974年に現地生産を目指してサンタクルス市内にSUTO(スト)という社名のツキ板生産会社を創り、今日に至っております。

SUTOという社名の由来については、「サンタクルスの発祥地の地名で、豊富な湧き水が末広がりに町に流れ込み、町の貴重な飲料水となっており、とても縁起が良い名前である」と簡単に聞かされていましたが、先日協会からお送り頂きましたサンファン日ボ協会発行のABJ通信4月号のサンタクルス市450周年記念式典開催の記事に「Nuflo de clavesが代表とするスペイン人征服者らによって1561年2月26日、チキートスのスト(Suto)河岸に”サンタクルス・デ・ラ・シエラ”と名乗る市街地を創設したのが、現在のサンタクルス市の始まりとされている」と詳しく書かれており、社名の由来を再認識した次第です。

SUTO社の竣工式には当時のウゴ・バンセル大統領にもご臨席頂いた事から、同社で生産してい

る銘木の中には、この大統領の名前を頂き、“バンセルローズウッド”と名づけたものもございます。



写真 3 製材される Morado の原木

SUTO の設立から数年後、山林で原木を伐採し入手する権利である伐採権(コンセッション)をボリビア政府から取得し、現在サンタクルス市より鉄道沿いに西に向かって約 500 km 走ったサンターナという町の北部の山に 10 万ヘクタール(ha)の伐採権を所有しています。

木材の伐採といえば不法伐採や環境破壊などマイナスイメージが先行しがちですが、ボリビアの森林法はコスタリカの森林法を模して作られており、森林の持続的更新という点では非常に合理的な法律だと言えます。SUTO の 10 万 ha の伐採権を例にとると、地形保持の理由から水辺や崖などの周辺の面積(全体の 20%)は伐採の対象から外され、残りの 8 万 ha が伐採の対象となっています。これを 20 年間で伐採するというルールになっており、従って 1 年間に伐採できる面積は $8 \text{ 万 ha} \div 20 \text{ 年} = 4 \text{ 千 ha}$ と制限されています。また伐採できる木の太さも「人の胸の高さで〇〇センチ以上」と樹種ごとに定められており、それ以下の太さの木は伐採できません。またこれも樹種ごとに、伐採する立木 10 本に対して必ず 1 本は「子孫を残すための種木」として残しておかなければなりません。そして一度伐採した場所は 20 年間手をつける事ができず、20 年という歳月が原木を切り出す時に作った道を元通りの森の姿に戻し、また

伐採されなかった小径の木の生長も促すというように、伐採と森林再生の両立を目指した現実的な法律だと思っております。

8 月後半にボリビアを訪問した際に数年ぶりに山に入り、伐採現場を視察して参りました。現場では伐採機械の故障への対応、雨で痛んだ道路の復旧、そして周辺村落とのトラブル防止など、さまざまな問題に対応しながら原木の伐採が行われており、苦勞して切り出した貴重な天然資源である木材を、より有効に活用しなければならないという使命を再確認したところです。

ボリビアの片田舎で

イルパイルパのパロキア滞在記

エピローグ 第 1 回 ボリビアの土を踏んで

横須賀市市立諏訪小学校教諭

椋原ふゆ

この夏、ふとしたきっかけからグーグルの航空写真で、ボリビア、コチャバンバ州にある小さな村、イルパイルパを探した。検索しても名前が出てこない。地図上には名前がのらない人口 3000 人ほどの村だ。しかしこの日本の裏側ボリビアには、確かにこんな名前の村がある。航空写真の上で、コチャバンバからの道をたどってイルパイルパの方へマウスを動かした。街から車で約 2 時間半の一本道。アスファルトの道がいつのまにか土の道に変わる。周囲はただ山に囲まれ、農地らしい広い敷地のところどころにポツポツと見えるのは土作りの農家に違いない。やっと小さな村のような景色が見えてきた。イルパイルパだ。この村に私は、某カトリック修道会のボランティアとして 2008 年 6 月から 2010 年 2 月までの約 2 年間をすごしたのだ。住んでいた家や公園、教会、学校、周囲の山々……懐かしい場所がああ時のまま変わらずにあった。帰国して一年以上が過ぎ、現実の生活の中で思い出になりつつあったボリビアでの生活が、昨日のここのように甦ってきた。

イルパイルパへ

2008年6月12日。コチャバンバへ到着後、乗り合いタクシーで最終目的地であるイルパイルパへ向かった。私はイルパイルパのパロキアという場所に行くことになっていたが、実はパロキアとは何なのか全く知らなかった。そこにはスペイン人シスターが一人と、現地のボランティアの女の子が一人いて、そこに私も住むのだということだけ聞いていた。

国道らしい一直線の広い道を暫く走ると、赤土の崖が迫るカーブの多い道が続く。遠くの方にはなだらかな山々、土やレンガ造りの家々、乾燥した土地の所々に動物がたたずむ姿と畑で働く人の姿が見える。まぶしい真昼の太陽の下で、ゆっくりと静かに営まれている田舎の光景だった。やがて黄色く乾いた土の道にさしかかり、タクシーは砂埃を立てながら進んでいった。

パロキアに着いた。大きな黒い鉄の門をくぐると、平屋の校舎のような建物の後ろに校庭があり、校庭を囲む屋外教室には子ども達がわんさと居て、どうやら勉強中のような様子だった。先生らしき人たちもいた。反対側の図書室からは中高生くらいの若い子達が出たり入ったり。校庭の隅ではダンスの練習をしている人もいた。いったいここは何だろうとあっけにとられていた次の瞬間、勉強の時間が終わったのか一斉に子ども達の騒ぎ声が聞こえてきた。

このパロキアで一緒に暮らすことになったもうひとりのボランティア、ロズメリと対面した。高校を卒業したばかりのロズメリはすらっとスタイルが良く、ちょっと内気な、長い黒髪の典型的なケチュア美人だ。シスターとの二人暮らしではきっと寂しかったに違いなく、私が来ることをとても楽しみにしてくれていたらしく、嬉しそうに挨拶を交わしたが、片言の挨拶を終えたら話が尽きてしまった私を見て、ちょっとがっかりした表情を隠せないようでもあった。

イルパイルパで初めて迎えた次の日の朝。雲ひとつない真っ青な空だった。乾季の澄み切った空

気が冷たく、向こうの方に、村をぐるりと囲む山々が見えた。長い間待ち焦がれたボリビアへととうとう来たのだと実感した。こうして私のボリビア生活が始まった。

パロキア

私が派遣されたパロキアという場所は、直訳すると「教区」という意味だが、村の子ども達から大人までを対象にした、総合教育センターのようなものである。このパロキアは、ボリビアへ来て40年になるという、70歳近いが実にパワフルなスペイン人のシスターによって、イタリア人の神父様と連携して活発に運営されており、年間を通してさまざまな仕事があった。

パロキアは朝7時から夜10時まで開放され、来訪者にはいつでも対応する。人々は無料で設備を利用したり、活動に参加したりできる。主な活動は子ども達の補習授業、お母さん達の衛生教育や手仕事訓練、中高生対象の日曜学校、サッカー大会、クリスマスや聖週間など教会行事の準備だった。それに加えてシスターは村の高校で、ロズメリはイルパイルパから歩いて一時間以上離れた集落の小学校で宗教の授業を受け持っていた。また夜には、溜り場を求めてやってくる青年達と一緒に遊んだり話し相手になったり、パロキア内にある駄菓子屋に立ったりした。

私たちボランティアは朝7時にパロキアの門を開け、シスターと一緒に朝一番で祈りの時間を持つ。シスター曰く、神様の助けなしでは何もできない私たちはまず、神様に一日の力と光を願うのだと言う。互いの思いを分かち合い、聖歌を歌い、神様の前で謙虚に祈ることから一日が始まる。世界の各地から来てなぜかこうして出会った私たちが心を合わせたひと時だった。

朝食、掃除、買い物や昼食の準備を済ませ、それぞれの活動開始。開放時間内なら誰でも訪ねてくることができるが、パロキアを利用する人たちは主に貧しい人たちだった。家では勉強を見てもらえない子ども達、家には勉強する場や本がない

中高生達、そして何となく人恋しくて人との交わりを求めて集まってくる青年達、また、遠くの農家から何時間も歩いて来て食べ物や服を請う人たちもいた。

実は初め、私はこのパロキアでの仕事が正直不満だった。例えば夜、青年達が校庭でサッカーをしたいと言って、ボールを借りに来る。家の戸をドンドン叩くので出てみると、耳にヘッドホンをつけた無愛想な青年達がただ一言、「ボール」と言う。ムカッとする気持ちを抑えてボールを渡しなが、ら、「後で返しに来てね」と言うのだが、たいいていの場合、貸したボールは後で空しく校庭に転がっており、それを黙って片付ける羽目になった。ロズメリとよく「私たちはどうせボール片付け機だよ」と愚痴を言い合ったが、パロキアを利用する人たちの態度には私たちに対する敬意や感謝の姿勢が全く見られず、私はただ利用されるだけの存在で、何のためにこんなことをしているのか疑問に思う日々が続いた。しかしだんだんと、本当に少しずつ、ここでの仕事の意味や、自分に課されている役割の大切さを実感できるようになっていった。

例えばボールを借りてお礼も言わない青年達に、ただ礼を言えと言うのは簡単だけれど、そうではなくて、人づきあいが下手で礼儀を知らない彼らに話しかけたり一緒に遊んだり、こちらから寄り添うことから始める。こちらが心を開くと、そんな彼らも少しずつ心を開いてくれる。そしてボールを手元に返してくれるようになり、そのうち、ありがとうの言葉も自然と出てくるようになる。信頼関係を築くのは簡単ではなかったが、このパロキアが目指している教育は、温かい人間関係などもしかしたらほとんど体験してこなかった人たちに、そんな人間関係もあるのだ、ということ伝えていくことだったのかもしれない。

子ども達との出会い

パロキアで私が最初に任された主な仕事は、子ども達の補習授業だった。村にはひとつしか小学

校がなく、同じ建物を使って名前の違う午前校と午後校に分かれていた。午前中の学校へ通う子ども達は午後の、午後の学校へ通う子ども達は午前中、パロキアの補習授業に来る。授業内容は、お祈りの後、全体でまず他者との関わり方や物の扱い方など道徳的な話をしてから各クラスに分かれて、宿題支援以外に音読、計算、作文指導などを行う。授業後に顔や爪はきれいかなど衛生チェックをしてから手を洗って、おやつ時間になる。全員無料で日替わりの飲み物とパンとバナナを貰えることになっている。

補習に来る子ども達の中には、片親だったり、本当の親は出稼ぎでいないために祖父母や親戚に育てられたりしているケースが多く、皆どことなく寂しさを抱えているように見えた。生活面での指導には手を焼くことが多かった。例えば、宿題に使う教科書は当然各自に一冊ずつはないのだから、数人で仲良く使えれば問題ないのにそうはいかず、決まって取り合いになり、喧嘩になる。すぐに手が出る。その上お互いに相手のせいにするから埒が明かない。鉛筆一本、消しゴム一個、一緒に使うことや貸してあげることがなかなかできない一方で、自分は人の物を欲しがったり、ちょっとでも間違えたノートのページをビリビリ破いて捨ててしまったりする。

勉強でも、教科書を写したりきれいなイラストを描いたりすることはできても、自分で考えて、自分の言葉で表現できる子どもは少なかった。勉強がわからないせいか、日常のあり方がそうさせるのか、自分に自信のない子どもが多く、新しいことにチャレンジさせたり、発言を促したりするのには骨が折れた。言い訳はいつも“Tengo miedo(怖い)”と“No puedo(できない)”だった。

そんな子ども達もひとたび勉強時間が終わると目の輝きが変わる。ビー玉やこま、おもちゃなどで遊ぶ子もいるが、やっぱり一番人気はサッカーだった。子ども達はペコペコなボールでも上手に操って、授業中は冴えない顔をしていてもフィールドの上ではヒーローだ。私も子ども達とは思

きり遊んだ。サッカーにバスケットにおままごと……。暇さえあれば村を回って道端で遊んでいる子ども達に声をかけたり、家を訪ねたりした。一緒に時間を過ごすうちに、臆病であり笑わなかった子どもも、本来の人懐こさを見せてくれるようになった。話すことに慣れていないのか、ただ黙って手を握ってくる子もいた。ひとりひとりに接していくうちに、子ども達はそんなふうには、言葉による個人的な関わりを求めているのだということに気づいた。本当に自分が大切にされているという実感を彼らは渴望しているのだと思えてならなかった。

遠足でのできごと

ただひとつ、私の目にも明らかなことがあった。パロキアに来ている子ども達の中には、比較的豊かな家庭の子ども達もいた。イルパイルパにはコボセという大きなセメント工場がある。コボセとつながりのある家庭の子どもは農家の子どもよりも清潔感のある身なりをしていたので一目瞭然だった。一見交わっているかのように見える両者の間には、実は境界線が引かれていることに私も気づいていたが、それがはっきりと表れた、胸の痛む出来事があった。

年度末には、補習に来ている子ども達の遠足がある。学校では、遠足へ行けるのは旅費が払える子ども達に限られてしまうが、パロキアの遠足は、一年間勉強を頑張った子ども達への神父様からのご褒美だった。行き先はコチャバンバ市内の公園。そこには2Bsで乗れるトロッコ列車が走っていて、きっとみんな乗りたかったに違いないが、乗れたのはお小遣いを持っていた裕福な家庭の子ども達だけだった。あるグループの子ども達が私の分まで払ったから一緒に乗ろうと誘ってくれた。もう発車するからと急ぎ立てられて私はとっさに乗ってしまったのだが、周りにはトロッコに乗れない子ども達が群がって見ている姿があった。上級生の男の子が一人、一度乗ろうとしたが何を思ったか乗るのをやめた。

トロッコは走り出した。私たちが乗っていく姿を無言で見送っている、恨めしさと悲しさと切なさが入り混じったような子ども達の目は、今でも脳裏にはっきりと焼きついている。私の気持ちを察したのか、誘ってくれた女の子の一人が「あの子達のことは心配しなくていいの。あの子達の家だってお金持ちなのに、親がケチだからお金くれないだけなんだから。」と言う。普段は優しくて気の利く子だったが、これが現実なんだと思った。持つ者と持たざる者の差ははっきりとあり、容赦なくその差が露にされた。私自身も、あの子ども達に寄り添おうとどんなに頑張っても、たった2Bsを払えない子ども達の切なさを、屈辱感を、本当には理解することができない、別の世界の人間なのだということを思い知らされた気がした。

トロッコが一周する間中、私の頭の中は罪悪感でいっぱいだった。一周して帰ってきた時も、発車した時と同じ子ども達が、同じ場所で、同じ顔をして待っていた。幸いその日、私は50Bs持っていたが、子ども達の数は30人。運転手さんをお願いして、なんとか50Bsで全員を乗せてもらうことができた。小さな子ども達は大はしゃぎで喜んでいて、さっき一度乗ろうとしてやめた上級生の男の子はなかなか乗りたがらず、一緒に乗ろうよ、と説得されてしぶしぶ乗ったものの、ずっとうつむいていた。最後にみんなで列車を降りるときに、ふと顔を上げて無言で私の顔を見た時の、彼のどことなく潤んだ目は、私を非難するような陰しきはなく、何かを訴えているような、何かを伝えようとしているような目だった。彼が本当は何を言いたかったのかは分からないが、もしかしたら彼ももっと小さい頃に、たくさんの屈辱を体験してきたのかもしれない。ポリビアには、彼のように小さな心に傷を負って成長してきた子ども達がきっと大勢いるに違いない。私は、子ども達の中に現実のポリビア社会の縮図を見たような気がした。

(つづく)



写真4 パロキアの子も達と

もうひとつのボリビア

ラテン文化センター横浜
ハイメ・モラレス

まず、はじめに自己紹介をさせていただきます。私はボリビアのラ・パス生れ、サンタクルスにも住んでいました。ボリビアではマスメディアで働いていました。長い間ボリビアを離れていますが、いつも心の中に子供時代のボリビアの思い出があります。

現在私はラテン文化センター横浜(CCLY)を開校し、スペイン語教室とラテン文化を紹介しています。私は日本と南米の文化の架橋になりたいと思っています。(以上、日本語での自己紹介)



ボリビア共和国、今のボリビア多民族共和国の特徴は、長い間、アンデスの美しさであると考えられてきました。アンデスの美しい景色は、この地域で発展してきたアンデス文化と同様、大変有名であり、観光ガイドの多くはボリビアを「アンデスの国」として紹介しています。

雪を頂くアンデスの峰々を大西洋に向かって西に向かっていくと、ジャーノ(大平原)、セルバ(森林地帯)、カニャーダ(溪谷)からなる広大な地域が広がっているとは、多くの人が知らないかもしれません。豊かな水をたたえた、船の航行でも可能な河川と熱帯気候が、人々を温かく迎えてくれ

るでしょう。

ボリビアの人口の60%以上が、先住民の言語を母語としていて、その内12%はスペイン語を話さず、48%がバイリンガルであり、残りの40%はスペイン語だけを話しています。現在ボリビアにはクリオーリョ(白人の子孫とメスチーソ)とともに38の先住民が暮らしています。

前述のように、この民族的多様性にも関わらず、ボリビアは明らかにアンデス高地、アルティプラノの国、つまりケチュア、アイマラの国であると捉えられています。しかし、ボリビアの国土の約2/3はエルオリエンテ(東部)、つまりアマゾン川流域と東部平原地域に属していて、この区域は別の多様な民族的、文化的、言語的な特徴を持っています。

ボリビア西部のアンデス地域の民族は、アイマラ族、ケチュア族、チパヤ族、カジャワヤ族、ウル族の5つです。これらのアンデス先住民はこの地域の人口の40~90%を占めています。彼らは500年以上に亘って、スペインの支配の下、被植民者としてその支配を肩に受けてきたといえます。現在もまだ、クリオーリョ(ヨーロッパ系中南米人)、メスチーソ(白人と先住民の混血だが、文化的にはクリオーリョと同様)、サンボ(黒人と先住民の混血)、ムラート(黒人と白人の混血)、チョーロ(白人と先住民の混血だが、文化的には先住民の影響が大きい)として形を変えて植民地時代の特徴を引き継いでいます。

一方、アンデス山脈のもう一方の側の先住民は、全く違った形で生きてきました。大部分が、征服者でも、被征服者としてでもなく、尊厳を失うことも、高地にある銀や鈴を収奪される恨みに苦しむこともありませんでした。その上、国家は長い間彼らを見捨ててきたので、このジャーノ(大平原)や溪谷の人々は、自分の問題は自分自身で解決することを学び、そのため、個人で、また同時に共同労働に基盤を置いた独特の文化的アイデンティティを作ってきました。明らかな例は、水、電気、電話の協同組合であり、今これらは発展し

て、ボリビアの民間資本のほとんどを占めており、また、他地域でもこの地域の協同組合をモデルとして踏襲してきています。国家に依存しない彼らは、何か問題に直面したとき、アンデス地域の人々とは違った形で問題解決を図ってきました。

低地にはアマゾン流域のジャーノ（大平原）や湿潤な森林に暮らす 30 の民族がいる。それぞれの民族は身体的な特徴は類似していても、文化的、言語的には異なった特徴を持っています。これらはアラオナ族、アヨレオ族、バウレ族、カニチャナ族、カヴィネーニョ族、カユババ族、チャコボ族、チマネ族、チキタノ族、チリグアノ族、エセエハ族、グアラスーウェ族、グアヤジョ族、イトママ族、ホアキニアノ族、レコス族、マチネリ族、マロバ族、モレ族、モセテン族、モビナ族、モセーニョ族、ナウワ族、パカウアラ族、シリオノ族、タカナ族、トロモナ族、ヤミナウワ族、ユキ族、ユラカレ族です。チャコの森林地帯、リオプラタ流域には、グアラニー族、タピエテ族、ヴィーンハエック族が暮らしています。

このようにボリビアはその名前が示す通り、他民族の国です。そしてこの違いの中に統一感があり、文化的民族的な多様性を保持しています。また、ボリビアにはたくさんの移民がおり、ユダヤ人、レバノン人、ユーゴスラビア人、日本人、ドイツ人、そしてプロテスタント革命の流れを汲むアナバプチスト派までが、今やボリビアの一部であるということも考慮しなければいけないでしょう。

このようなボリビアの特徴は、多言語的、多文化的な教育によって統一され、組み入れられなければなりません。子供たちがお互いを受け入れ、お互いの違いを理解して、学び、それを活用して、協調して働くことが、ボリビアの宝であるといえます。「もうひとつのボリビア」とはアマゾン地帯、チャコ、ジャーノに住む人々であり、また当然のことながら、外国に住んでいるが、心はボリビアにあるボリビア人でもあるといえるでしょう。

（本文西語翻訳 細萱恵子）

ボリビア訪問記（第3回）

日本ボリビア協会理事

理事 杉浦 篤

今回は最終回とし、Cochabamba 市、La Paz 市での訪問先について報告します。

Cochabamba 市

13 年前にキリスト教系修道会から独立した野原昭子さんが園長を務める身障者孤児施設・聖マルティンの家の自家菜園で作られた野菜や卵、それに同園入所者手作りの民芸品や文房具などを小売している市内のショップを先ず訪ねた。野原さんをサポートする Cochabamba 在住の日本人・日系人・ボリビア人のボランティアの方々が数名おられて、このお店で手作りのパンやケーキも販売されており、結構固定客がついているとのこと。

次いでボランティアの方の車で市内から 40 分位かかる郊外の聖マルティンの家を訪ねた。野原さんの協力者の田島さんや数名の日本人・日系人とボリビア人を合わせて 16 名のスタッフが入所者 16 名と通所者 10 名を合わせ、乳幼児から 18 歳まで 26 名の身障者のお世話をしておられた。日本の協力者・支持者からの支援や野原さん達の長年に渡る努力により施設の建物・設備や運営の仕組みはかなり充実しているように見受けられた。

しかし、財政的には依然自立は容易ではなく、日ボの各方面からの支援継続が必要と感じられた。できれば経常的にかかる生活物資について何か継続的に支援する方法がないかを、今後日ボ両方の関係先と相談して行きたい。

このほか、同市では、サンフアン出身の日系人でボリビアの小中学校の教育指導要領への提言づくりを支援しておられる出合さん、JICA 出身で同市在住の左海さん、それに Ex-Becarios OB/OG (JICA 帰国研修員) 6 名の方々にお会いした。

当地は高地の Lapaz と亜熱帯の Santa Cruz の丁度中間にあり、標高 2600m の温暖な気候にも恵

まれ、歴史的にも古く、ボリビア各地から富裕層退職者の移住が活発である。

また、市内中心部の中央市場には野菜・果物・肉・魚・日用品・家電製品などが所狭しと並べられ、先住民系のオバサンがデンと腰を据えて商売を仕切っているのが印象的であった。

日系人も医師・歯科、薬局など 20~30 名程度が在住しているが日系人会はまだない模様。

La Paz 市

当市は、首都である関係で、日本大使館・JICA ボリビア事務所、日本企業現地法人・駐在員事務所、日系人ラパス日本人会、日本人長期滞在者、ボリビア外務省関係者、JICA 帰国研修員、TOYOTA の販売代理店 TOYOSA S.A などを訪問するとともに、日本の経済産業省/JOGMEC とボリビア鉱業冶金省とが共同開催したリチュウム開発セミナーへオブザーバーとして参加した。

ボリビア側のリチュウム関係の中央・地方政府・公社の代表、及び、日本側の田島経済産業省政務官や日本からの関係業界からの代表などの方々と広く面識を得ることができた。

大使館では渡邊大使、中島書記官、岡田経済担当専門調査員と面談し、ボリビアの政治経済一般情勢やリチュウム開発への取組などについて話を伺った。

JICA ボリビア事務所、松山所長・上島次長からは、JICA の中南米関係予算は日本政府方針により、減少傾向にあり、又奨学研修生についてはボリビアへ帰国後の就職先不足という問題点があるということを知った。

火曜会 (La Paz の日系企業トップの連絡会) のメンバーの方々とは個別に訪問し面談させて頂いた。現在日系企業で唯一最大の現地法人である住友商事(株)のサンクリストバル鉱山会社の野島社長によれば、創業以来ボリビア人社員の教育、環境、安全と地元社会へのCSRに力をいれており、最近では幹部社員に 10 名のボリビア人を登用できるまでに成長してきたとのこと。また同社の亜鉛、鉛、銀の精鉱輸出はボリビア鉱業輸出部門の 5

0%を占め、同国輸出総額でも 11%になることなどと同った。直接雇用社員数 1200 名、間接雇用 3000 名とボリビア社会への貢献大である。

日本人会では田中会長、秦副会長、小森幹事長、西沢前会長らの皆さんにお会いした。日本人会でも世代交代の時期に当たり近年若返りが顕著であること、ボリビアの左翼 MAS 政権の先行きは内政外交共になかなか見通しが付き難いことなどと同った。

また、元駐日ボリビア大使のダブドウ氏、元同一等書記官のパチェコ氏にもお目にかかったほか、JICA 帰国研修員の方々 8 名にも JICA のオフィスで懇談する機会を得た。Santa Cruz, Cochabamba, La Paz を通じて約半数が女性で、医師、看護師など医療関係者の方が多いのが印象に残った。

現地長期在住の日本人の方々にも何人かお会いし、ボリビア社会について現地生まれの日系人とはまた別の観点を伺い大いに参考になった。

Santa Cruz, Cochabamba, La Paz を通じて、日本人・日系人の皆さんが異口同音に言われたのは、結局ボリビア人自身の成長なくしてはこの国の成長・発展は覚束なく、この点から、官民共に中長期視野立っての人材の育成が急務かつ不可欠であるとのことであった。(了)



写真 5 ラパス市街地から見えるイリマニ山

じゃがいもの旅の物語

インカからジパングまで 17

日本ポリビア協会 副会長 杉田房子

赤い瓦に、がっちりした石壁の家々。土をきれいにならした畑。オリーブの樹の縁に、点々と明るいオレンジの実。

海を離れ、河口に入ってからずっと同じ景色が河畔にひろがりつづくのを、船の全員が飽きずに眺めていた。

金銀宝石に毛織物。皮細工に珍しい動植物。新世界からの積荷で船脚の重いスペイン船は、大西洋を渡りきるとカジス湾に入り、グアダルキビル河を遡って、セビリヤの町で航海を終える。

アンダルシア平原の沃野を、河口から町まで80キロあまり遡るこの最後の行程は、給料や褒美をもらって故郷に錦を飾るスペイン人の船乗りにとっては、凱旋の行進さながらだった。手伝いにも乗り組まされたインディオや黒人にとっては航海中のつらい使役のあとに、セビリヤの岸壁で待ち構えている荷役の前の、貴重な骨休めだった。

土の香りのただよう風が、何十日ぶりかで甲板を吹き抜けていく。

はるばるとインカ帝国から連れてこられた男女と、その足元に大事そうに置かれたじゃがいもの袋の間を、その風が渡っていった。インディオの船乗りの片言と、なによりもスペイン人の浮かれるようで、長い旅もいよいよ終わり近いのを知ったインカの男女は、細い小さな目で、じっとアンダルシアの野山を眺めつづけている。

「女だ。見る。スペインの女だぜ」

スカートを頭巾姿に、船乗りが歓声を上げる。「町だ。セビリヤだぞ」

近づく屋並みに、足を踏み鳴らす。甲板の声と足音がこだまする河面の先に、アルカサル城がそびえ、ジェラルダ塔がそそり立っている。8世紀から13世紀まで、イスラム教徒のムーア教徒のムーア人に支配されていた当時の城と塔は、国土を回復したいまとなってはスペイン人の誇りとな

っていた。

船は、岸壁に着く。突端に、「金の塔」トレ・デル・オロの立つこの岸壁が、新世界からの旅の終着地だった。積荷の金銀は、トレ・デル・オロから河を背にした屋並みに折れていく石畳の道を運ばれる。突き当たりがアルカサルだが、「王立造幣所」レアル・カサ・デ・モネータと文字を刻んだ彫刻門がいかめしい。ついこの間まで、ムーア人の支配と富の象徴だったアルカサルは、いまやスペイン人自身のもので、しかも新世界を支配による富の象徴となっていた。

甲冑と槍をきらめかせる兵士に守られ、金銀宝石の箱を積んだ馬車が、石畳をきしませていくのを、インカの男女は岸壁にたたずんで見送った。岸壁には、船からおろされた荷が山積みされている。金銀に宝石に珊瑚の箱。毛織物に皮細工の束。動物のラマに植物のじゃがいも・・・。

西半球を半周してきた岸壁の人と物を、東半球の西端に近い町セビリヤの人々が、声高に話あいながら眺めていた。

じゃがいもの袋をかかえたインカの男女は、なかでもセビリヤの人々の注視を浴びた。コロンブスの新世界発見後、ずいぶん多くのインディオが連れてこられ、いまでは往来する船に乗り組んでさえいる。セビリヤの人々はもう見慣れているはずだったが、肌色も顔形も似たようできて、インカの男女はまるっきり違っていた。

インディオといえば裸同然、着ているとすればスペイン人のお古のはずなのに、見たこともない艶々したウール地に刺繍飾りまでした服を着ている。男は帽子、女はベルトで頭を整え、足は革編みのサンダルを履いている。

ありのままの姿で、インカの男女をスペイン国王の目に触れさせる、というのがインカ帝国を征服したピサロ総督の厳命だった。しかし、その姿はインディオを見慣れたセビリヤの人々に、まず強烈な印象を与えたのだった。

「肌が白ければ、晴着姿のジプシーだね」

「さすがは黄金郷のエル・ドラド。住んでいる

人間も豊かな証拠だ」

「神よ、私をペルーへいかしめたまえーか」

わあわあ話しあう人々は、インカの男女が細い目をさらに細めて、逆に注意深く見つめているのには、気がつきもしなかった。

ここが、強くて賢くて、なんでも持っている白いピラコチセの本当の故国なのだろうか。城や塔は見事だが、アンデスの太陽の神殿のほうが大きい。道は石畳だが、インカの皇帝の道のほうが広い。なによりも、ここに群がっている人々だ。男の着物もズボンが長くて上衣同様きっちりした格好の違いだけで、わしらが着る上下とたいして変わらない。布が薄っぺらだから、ラマやアルパカの毛を紡いだわしらのアルパカ布のほうがずっとましだろう。女が手に持っているのが肩掛けなら、わしらの女のアルパカ織りのほうが、布地も模様もはるかに優る。

「履いているのは、布の靴ではないか」

「女は、木の箱みたいなものを履いている」

「男が被っている平たい、縁のないものは、帽子とすれば雨も陽も除けられないね」

囁きあうインカの男女は、妙な匂いに鼻をむずからせた。脂っぽい。しかし、すえたような匂いが、岸壁のまわりの人が増えるにつれて、濃くただよってくる。

「これは、ピラコチヤが船で食べていたチーズというものの匂いだ」

くしゃみをしたインカの男は、そのはずみで思っていた。肉がない時に、黄ばんだ白いかたまりを、パンと一緒に船乗りの白い人は食べていた。一度、すすめられて手にしたことがある。すえた匂いだけで、鼻がおかしくなった。毎日あれを食べているのなら、体中から匂うだろうし、人が集まれば、その匂いがたちのぼっても不思議はない。触っても食べてもつるりとした感触は、生のパパスージャがいもの皮をむいた時に似ていたが……。

男は、じゃがいもの袋をかかえ直した。胸をこする丸い、同じ感じが頼もしかった。(つづく)

新入会員

平成24年8月以降会員になられた方

■維持会員

株式会社 ラティエノ (旅行会社)

■個人会員

石橋輝之 (アビーム法律事務所 弁護士)

森内耕二 ((株) ジョイフード代表取締役会長)

池上正則 (元 JICA ボリビア農業技術指導派遣員)

関 邦博 (元神奈川大学理学部教授、High Altitude Pathology Institute(ボリビア)客員研究員)

森 妙子 (元 JICA ボリビアシニアボランティア 日本語指導員)

会員訃報

下記の会員の方がお亡くなりになりました。謹んで哀悼の意を表します。

末永 昌介 24年3月27日死去
享年84歳

土橋 洋 24年2月9日死去
享年64歳

編集後記

今号においても、ご寄稿いただいた記事から、色々な形でボリビアに関わっていらした方々がいることを改めて知ることができます。また、皆様の周囲にボリビアが気になる、ボリビアが好き、ボリビアのことをもっと知りたい、というような方がいましたら、是非、当協会をご紹介いただければと思います。

(編集委員)

杉田房子 細野豊 金木克公 金田正敏
細萱恵子